

ネオニコチノイド系農薬を使わない病虫害防除を探るフォーラム(全3回)

第3回 ワークショップ 「脱ネオニコ農業への地図を描く」

主催：一般社団法人アクト・ビヨンド・トラスト

協賛：(株)大地を守る会、らでいっしゅぼーや(株)、生活クラブ事業連生活協同組合連合会、よつ葉生活協同組合

発題者：(あいうえお順)

稲葉光國(民間稲作研究所)：脱ネオニコ系稲作の確立

大野和朗(宮崎大学准教授)：環境と人に優しいIPMの展開

後藤和明(らでいっしゅぼーや、RADIXの会)：ネオニコフリー宣言の課題

徳江倫明(FTPS、生きもの認証推進協会)：生きもの認証について

富居登美子(よつ葉生活協同組合理事長)：東電福島原発事故とネオニコチノイド不使用の取り組み

山田敏郎(金沢大学名誉教授)：蜂群崩壊症候群(CCD)研究の最前線

ワークショップ・ファシリテーター：

田中 滋(アジア太平洋資料センター)

【プログラム】

10:00 開会

10:15～12:30 6人の発題者によるプレゼンテーション(20分×6+休憩10分)

12:30～13:30 昼食

13:30～16:20 地図づくりワークショップ

導入・挨拶・簡単なアイスブレイクなど

ワーク1 参加者自己紹介と脱ネオニコ運動の現状分析(15分×2セット)

ワーク2 脱ネオニコ農業実現のために「誰に」「何を」働きかける?(15分×4セット)

ワーク2の成果発表(5分×6グループ)

ワーク3 フォーラム宣言案ブレインストーミング(20分×1セット)

ワーク3の成果発表(3分×6グループ)

16:20～16:25 フォーラム宣言案シール投票

16:30 閉会

■ 稲葉光國(いなば・みつくに)

1944年生まれ、NPO 法人民間稲作研究所理事長。成苗育苗技術・循環型肥培管理技術・太茎・大穂による安定多収技術・水田生物の多様性を活かした抑草技術を提案。著書に、『あなたにもできる無農薬・有機のイネづくり』(農文協 2007)他。

■ 大野和朗(おおの・かずろう)

1955年生まれ。九州大学大学院博士課程、果樹カメムシの天敵の行動生態に関する研究で農学博士取得。日米共同プロジェクト「バングラデシュ農業大学院計画」参加。福岡県農業総合試験場で野菜花き病虫害担当研究員を務めた後、1999年から宮崎大学農学部准教授。

「環境と人に優しいIPMの展開」

IPM(総合的病虫害管理)は農業への過度の依存や乱用が問題となった1960年代にFAOが中心となって提唱された概念であり、化学農薬への依存度を低減するため、化学的防除と各種防除手段を組み合わせた総合的な取り組みが提案されてきた。その中では、生態系サービスのひとつの機能とも言える、自然の調節機能(自然制御)を病虫害管理に活用することが強調されている。しかし、最近まで、生産現場では化学農薬中心の病虫害管理体系が慣行の技術として普及し、土着の天敵や拮抗微生物などによる病虫害管理技術が農家に広く受け入れられる

ことはなかった。農家を指導する都道府県の普及機関や農協でも、一部の地域を除くと、農業至上主義的な技術体系の普及が進められている。講演では、露地栽培や施設栽培での最新の取り組みを中心に、慣行栽培が地域に生息する土着天敵を活用できる環境となっていないこと、自然制御機能を活用するための具体的技術について紹介する。

■ 後藤和明(ごとう・かずあき)

1961 年生まれ。らでいっしゅぼ一や株式会社農産部長、Radix の会常務理事。90 年より、らでいっしゅぼ一や環境保全型生産技術基準「RADIX」策定に関わる。全国の産地開発と商品開発業務を主に行う。IFOAM(国際有機農業運動連名)理事、BM 技術協会理事。

「ネオニコフリー宣言の課題」

らでいっしゅぼ一やは契約農家 2000 世帯以上と直接取引を行って 25 年を迎えました。その中で生産現場を確認しながら、環境保全型生産基準「RADIX」の基準を 1996 年策定しています。特徴的なのは、圃場に土壌消毒、除草剤不使用の栽培です(稲作のみ除草剤容認)。

更に発ガン性、催奇形性、変異原性、水質汚染、人畜毒性、残留性の観点から、大地を守る会と連携して「禁止・制限農薬リスト」を実施・運営しています。ここ数年、ネオニコチノイド系農薬に対しては生産者と協議を進めています。野菜・果樹の多くの品目が使用されています。現時点では、成分としてフィプロニルは禁止。イミダクロプリド、ニテンピラム、クロチアニジ、ジノテフラン、チアマトキサム、チアクルプリドは制限。アセタミプリドは容認。現場及び有機農業を目指す生産者からの意見を聞けば聞くほど、慎重に進める必要があると思います。

■ 徳江倫明(とくえ・みちあき)

1951 年生まれ。78 年「大地を守る会」に参画、88 年「らでいっしゅぼ一や」を設立。その後、有機認証機関の設立などを手がけ、現在は(一社)フードトラストプロジェクト、生きもの認証推進協会代表、生産と販売を繋ぐエフティピーエス株式会社代表取締役。

「生きもの認証について——認証は『自分を伝える』道具です」

■ 富居登美子(とみい・とみこ)

1946 年生まれ。1994 年よりよつ葉生協理事、2005 年よりよつ葉生協理事長。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災、東電福島原発事故以降、子供が元気に育つために、放射能と農薬、添加物に妥協してはいけないという思いを強くし、ネオニコチノイド系農薬もその一つとして取り組んでいる。

「東電福島原発事故とネオニコチノイド不使用の取り組み」

よつ葉生協は栃木・群馬・茨城に組合員 26,000 名余りの地域生協。32 年前、よつ葉牛乳を飲む会がスタート。2009 年頃に前橋の青山医院、青山美子医師よりネオニコチノイド系農薬使用への抗議の電話で初めて知る。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と東電の福島原発事故で吹っ飛ばす。放射能汚染に対する対策と対応が検査機器の導入(2011 年 8 月)までピーク。その間も稲葉さんは、菜の花、ひまわりプロジェクトでの除染活動の中で、ネオニコチノイド系農薬の危険性を指摘、2012 年 3 月に米からまず始めようと勉強会と農家の不使用の同意。JA 新潟越後中央は 1 年遅れて不使用への実験田。2011 年の 1 年間の放射能問題の中で、放射能とネオニコチノイドのダブルパンチを避けようと決意。

■ 山田敏郎(やまだ・としろう)

1949 年生まれ、金沢大学名誉教授、IUCN 浸透性農薬タスクフォースメンバー。専門は高分子工学、熱力学、現在はネオニコチノイドの蜂群影響に関する研究。著書: Film Processing 等 18 冊。論文: 成形加工技術や CCD 研究等約 130 報。特許: 76 件。国内外学会発表: 約 450 報他、講演多数。

「蜂群崩壊症候群(CCD)研究の最前線」

21 世紀になって、ヨーロッパをはじめ北米等で蜂の大量死や不可解な蜂群の崩壊や越冬失敗が多数発生し、大

きな問題となっている。その原因として疑われているネオニコチノイド系農薬の蜂群への影響の長期野外実験による研究結果の概要を報告する。実験概要は下記のとおりである。

1. 2010 年度実験 2010 年 7 月 18 日～11 月 21 日(126 日)
目的:ネオニコの CCD 発現の可能性の確認
2. 2011 年度実験 2011 年 7 月 9 日～2012 年 4 月 2 日(269 日)
目的:農薬投与媒体(砂糖シロップ;花粉ペースト)の影響
3. 2012 年度実験 2012 年 6 月 28 日～2013 年 7 月 26 日(381 日)
目的:ネオニコ系と有機リン系との違い(中濃度)
4. 2013 年度実験 2013 年 8 月 13 日～2014 年 2 月 28 日(199 日)
目的:ネオニコ系と有機リン系との違い(極低濃度)

これらの長期野外実験により、ネオニコチノイド系農薬は CCD 発生や越ミスを引き起こすが、有機リン系は引き起こしにくいことや、蜂群絶滅までの蜂一匹当たりの農薬の摂取量は農薬入り砂糖シロップの場合は花粉ペーストの場合の約 5 倍であることが判った。

■ 田中 滋(たなか・しげる)

1981 年生まれ。アジア太平洋資料センター(PARC)事務局次長。早稲田大学工学部卒業後、米国コーネル大学にて公共政策とソーシャル・ジャスティスを学ぶ。2010 年 4 月より現職。参加型会議の進め方、NPO の活動を活性化させるファシリテーションを青木将幸氏に師事。

[abtサイトのトップに戻る](#)